

マールペルガーと重商主義商業学

齋藤光正

はじめに

ザイフェルトは経営経済学の発展段階を6期に分け、その第2期を「体系的商業学の時代」と称している。この時期はサヴァリーの『完全なる商人』が出版された1675年から始まり、ロイクスの『商業の体系』が出版された1804年をもって終わる。ドイツにおける商業学の体系化は、ルードヴィッチの『公開商人大学』（1752年）に始まり、ロイクスの『商業の体系』において全盛期を迎える。サヴァリーの商業経営学がドイツ商業学に数えられないのは、氏がフランス人であることによる。それではドイツ商業学の起源は、ルードヴィッチの『公開商人大学』に求められるのだろうか。実はサヴァリーとルードヴィッチとの間の時代に属し、前者の商業経営学をドイツに輸入し、これを後者に継承させたのが、本稿で取り上げるマールペルガーである。

マールペルガーは、しばしば熱狂的に称賛されることもあるが、他方でたびたび厳しく非難されることもある。氏はドイツにおいて、商業経営と商取引とを科学的に区別すべきことを要求した最初の著者である、という意味において称賛されなければならない。しかしもう一方でマールペルガーが『完全なる商人』の翻訳者であることから、氏がサヴァリーの模倣者あるいは崇拜者に過ぎないという意味において軽く取り扱われたり、あるいは無視されたりすることもある。このようにマールペルガーは、概して正当な評価を受けていない商業学者である。

本稿では、これまでにあまり取り上げられなかったマールベルガーの生涯を概説するとともに¹、氏が遺した多数の研究業績のうち、とりわけ商業学および官房学の観点から主要な文献を取り上げ、その特質を明らかにしようと思う。さらにサヴァリーとともに氏が重商主義商業学の主唱者に数えられることから、それに対して氏がどのような貢献を行なったかについて論じることとする。

I マールベルガーの生涯

マールベルガー (Paul Jacob Marperger) は1656年6月27日にニュルンベルクに生まれた²。オーバープファルツ出身の父親は、30年戦争の時代、将校としてスウェーデンに勤務したが、後にその気品を放棄し、ニュルンベルクに戻り市民生活を送った。

1666年、マールベルガーは10歳に過ぎなかったが、既にアルトルフでニュルンベルク大学の学生として登録されている。氏は父親の意志に従い、神学を学ばなければならなかったが、それを学ぶ気にはなれず、自分の将来にとってより重要と思われる法学に取り組んでいた。父親はそれを知るや、すぐに大学から息子を連れ戻し、商館に送り込むことにした。だがマールベルガーの学問的性向は、これによって妨げられることはなかった。このことは氏が後にキールで法学研究を再開したことや、生涯にわたってその認識を拡大させ、その知識を深化させる機会を無駄にしなかったことから明らかである。

父親はこのような息子の学問的傾向を満足させるべく、当時非常に重要な商工業都市として発展していたリヨンにマールベルガーを往かせることにした。氏はそこの商館で職業教育を受ける中、商人実務の実態に初めて接することになった。氏は新しい職務において多くの成果をあげるとともに大きな関心を持って取り組んだ。その旺盛な好奇心は、商業経営にとって必要な知識を獲得することのみに満足しなかった。氏はさらにリヨンの

さまざまな産業部門、すなわち手工業や工業の商業部門のみならず、生産現場の実態についても知ろうとしたのである。マルペルガーはかくてさまざまな多数の企業経済および技術問題に取り組み、この経験を踏まえて、それらに関する行政管理規則や国民経済政策、国民経済理論といった諸問題を取り扱うこととなった。ちなみに当時は国民経済問題のうち経済政策問題がかなり発達していた反面、経済理論の問題はあまり発達していなかった。

マルペルガーの経済実践における最初の逗留地がリヨンであったことを考慮すると、氏の商業政策的観念が、その数十年前に初めてコルベールにおいて最も強力な主唱者を見出したフランス重商主義によって形成されたものであろうことは頷ける。しかも氏の青年時代に受けたその印象が極めて強烈であったことを顧慮すると、マルペルガーにとって、コルベール主義は生涯にわたって重要な観念であり続けたに違いない。さらにマルペルガーがリヨンに滞在していた1675年は、コルベールの協力者であるジャック・サヴァリーの『完全なる商人』がパリで出版された年であり、本書はたちまち遠隔地にまで広まっていった。このことからマルペルガーが本書に接していたということは、恐らくかなりの確率で推測されうる。というのは、これに関する非常に多数の説得力ある状況証拠が、氏のその後のライフワークにおいて多数見出されるからである。それ故に独学的なすぐれた能力をもっていたマルペルガーが、商業実践から修得した特殊な技能を、当時最も多く使用された著書を通じて、つまりそれに伴う重商主義商業学の体系的な研究を通じて補ったであろうことは、恐らく確実である。

マルペルガーはリヨンおよびその後のジュネーブでの滞在を通じてフランス語に精通するようになり、その抜群の語学力をもってリヨンを越えたフランス経済全般の制度および特殊性にも習熟するに至った。またその語学力はサヴァリーを手本にそこで生まれた専門書、すなわち商業百科事典³を身近なものとして、商業実践から得た氏の印象はこれによって補足

された。かくてマールベルガーは、フランスの経済状態に関して、当時のドイツにおいて恐らく最もすぐれた識者になったのである。これについてヒルシング(Hirsching)は次のように述べている。「それ故に氏の著書において、とりわけフランスの商業・行政・工場制手工業制度に関して、当時の他の著書ではあまり正確に知りえなかった多くの確かな情報を見出すのである⁴⁾と。

マールベルガーはリヨンおよびジュネーブでの見習期間を終えた後、多くのドイツ諸領邦およびヨーロッパ諸国を歴訪し、最後はザクセンに定住した。氏が歴訪した主な地方としては、1681年に結婚し、長期間留まったハンブルクをはじめ、1714年にドレスデンへ転居する前の元の住まいがあったシレジアのエールス、ウィーン、リューベック、キール、ブレスラウ、モスクワ、ペテルスブルク、ストックホルム、コペンハーゲンを挙げることができる。さらに居住地としては言及されていないが、ベルリンにも公務のためにしばしば滞在していたのである。

氏が前述のさまざまな逗留地でいかなる職業に従事していたかは、残念ながら明らかにされていない。各地を転々としていたことから推測すると、氏が独立商人として商業を営んでいたとは考えにくい。恐らくあまり見かけない仕事に従事していたものと思われる。氏の著書の多くの箇所、氏が店員となって間もない頃、実務経験による知識を収集していたことが述べられている。また後年、氏が多くの諸侯の宮廷、とりわけロシアやスウェーデン、デンマーク、プロイセンそして最後に短期間ではあるがシレジア侯国エールスの宮廷において経済問題の君侯顧問として招かれ、活躍していたことも知られている。但しそこでの職務は、後にプロイセンやザクセンで要職に就いたときのそれとは異なり、氏は不安定な生活を余儀なくされていた。従って宮廷顧問になるまでの間、氏は商的任務と並行して公的職務を引き受けていたと考えられる。1712年、氏はポーランド国王およびザクセン選帝侯の宮廷・商業顧問官としてドレスデンへ招聘され、1714年以降そこに定住することとなった。

マルベルガーがいつ頃から執筆活動に着手したかは、明らかにされていない。というのは氏の初期の出版物（翻訳書を除いて）は、既に一部が公刊されていて、刊行年不詳の著書の続きとなっているものもあるからである。しかし氏の著作の刊行年から推測する限り、マルベルガーは恐らく他の職務と並行しておよそ1700年頃から商業学作家として創作活動を開始していたものと思われる。

マルベルガーは、この時代からさらに数十年先においてもなお、他の職務上の負担にもかかわらず、一般教養や専門分野の研究を疎かにすることなく、むしろそこに多くの余暇を捧げた。氏は非常にさまざまな学派の研究者と接触するためにあらゆる機会を利用し、講義を受けるとともに多数の本を読み、しばしば変化する環境に対して鋭い洞察力をもって接した。かくて本質的に独学者といってもよいこの実践的な商人は、時代の変遷とともに学者となり、やがて博学者となったのである。

マルベルガーは単なるドイツ最初の商業学作家ではない。氏は相対的に科学的方法を重視しながら、従来ほとんど論じられてこなかった分野を体系的に研究する学者であった。非常に長い氏の一連の商業学的著作から明らかのように、氏はこれに驚異的な徹底した方法で取り組んでいた。著作数に関しては異なった見解も見られるが、報告されている総数は多過ぎるというよりはむしろ少な過ぎると思われる。というのはマルベルガーの著作を完全に網羅し、把握するのは非常に困難であるからだ。

『ドイツ伝記概説』は、マルベルガーの公刊された著書94点および未刊の原稿71点について述べている⁵⁾。その大部分の著作が相当の大冊であることから、氏の量的業績は恐らく比類のないものといえよう。しかしながら質的業績についてみても傑出している。というのはさまざまな批判にもかかわらず、マルベルガーの著書がより新しい時代の良書によって取って代わられることはなかったからである。そうでなければマルベルガーの多くの著作が達成した幾度にも互る再版を説明することはできない。それ故、マルベルガーが経済、行政および科学において同時代の人々の

間にすぐに知れ渡り、有名になったことは不思議ではない。また氏は手代から商事相談役兼商法鑑定人を経て政府顧問官になったことにより、斯学の私的研究者並みの環境を手に入れることができた。そしてこのことが氏の進むべき方向を決定づけたと考えられる。

マールベルガーの大学における経歴については論じることはできない。というのは当時、経済学はまだ大学で教授されていなかったからである。斯学に関係のある官房学講座ですら、氏の死後3年たってから初めて開設された程度である。従って氏がその意義と必要性を幾度も指摘した商業学講座は、依然として大学教育の射程外にあった。それにもかかわらずマールベルガーは大学におけるその分野の普及に成功し、1708年にはベルリンのプロイセン王立学士院会員に任命された。この学士院は1700年にライプニッツ⁶によってプロイセン王立学術協会として設立されたものであり、後にドイツ最古の有名かつ偉大な協会として世界的に名声を博している。マールベルガーはザクセン選帝侯の下で働いている間もそうだったが、以来、この学士院会員として活躍したのである。

ハルナック (Harnack) は、マールベルガーの名声および招聘時代の経済状況について次のように語っている。「学者として氏はエルフェン (Christoph Heinrich von Oelven) とは全く別のタイプだった。氏の名前は商業学や政治地理学、統計学の歴史において鳴り響いている。氏はドイツにおいてこれらの科目を共に基礎づけたのである。しかしながら氏はまた極貧により貪欲になり、これを隠蔽し、依頼を受けた貨幣に関し厳しい批判を書いている⁷」と。

マールベルガーの生活様式や文体のバロック的特徴に鑑みて、氏が商業学分野に限らず、それを超えて他の多数の分野でも活動していたことが窺える。氏の著作の表題から明らかなことは、氏が官房学の領域に属する科目に限らず、それとは別の知識領域にも精通していたということである。科学的な目標設定もなく行なわれた翻訳や特異な著作、例えば実践的な生き方の手引きや感動的な文章も遺されている。さらに絶対王政時代によく

見られた賛歌や報酬のために書かれた機会詩といったものも書き残されている。このほか1698年に氏が皇帝任命作家 (poeta laureatus) として顕彰されたことにより、当時彼らがドクトル (Doctores) の称号をもっていたように時代観念に従って公民権を得ていたことも特筆に値する。

このようにマールベルガーの生涯は、概して多方面にわたって輝いた裕福な人生であったと見ることもできるが、他方でその影の部分がないこともない。マールベルガーは同時代の多くの官房学者と共に、その時々委任者の運命にかなり依存した生活を送っていた。慌ただしく波乱に満ちた氏の境遇の原因の一部はここに求められる。また氏の俸給が概してかなり少なく、おまけにしばしば何年にもわたってその支払いを待たねばならなかったこともあったため、しばしば金詰りに陥っていたことも想像される。マールベルガーの秀でた精神的敏捷性は、恐らくこの恒常的な経済的困窮と将来の不確実性がその背景にあったものと考えられる。それ故氏は再三再四弛まぬ行動に駆り立てられ、多くの出版物を刊行しなければならなかったのである。マールベルガーは生涯最後の地となったドレスデンにおいて、はじめて比較的静穏な環境を手に入れることができた。しかし1730年10月27日、彼の死はこの穏やかな生活を奪い去ったのである。

II マールベルガーの研究業績

マールベルガーが遺したライフワークについては、今なおその全容を概観しうる状況には至っていない。その理由は氏の著作物が非常に多数に上ることや、そこで取り扱われている対象が多岐にわたるということも挙げられるが、これだけに止まらないからである。ホイング (Hoynng, B.) はマールベルガーの著作について可能な限り完全な概要を作成しようと努めたが、その際この計画の支障となった問題点を次のように指摘している⁸。

第1に、バロック時代の精神を反映させた表題が、しばしば非常に長期にわたって、また部分的に挿入される要旨によって肥大していったことで

ある。その結果、書誌学的指摘において表題は一般に略式によってのみ表示されることとなり、そこに異なった版が出来上がった。

第2に、新版ではしばしば変形した表題が見られたが、それだけに止まらず若干の章は、新たに設定した表題の下に、独立した出版物として出版されることもあった。

第3に、マールベルガーが著書をしばしば自費出版しなければならなかったことである。そのため発行地または発行日付がしばしば欠けていたり、あるいはその両者が完全に欠如していたりすることがある。

第4に、マールベルガー自身も個々の著作において文献目録を掲げているが、残念ながらそれらはあまり信頼できるものではない。とりわけ時折氏は計画したり、あるいは出来かけであったりした作品を、一度も出版していないにもかかわらず、これを著書として挙げているからである。

第5に、マールベルガーの著作の多くが著者不明であったり、あるいは別の名称で出版されていたりすることである。

最後に、氏の多くの著書が極めて難解であり、また多くの著作がほとんど入手できないことである。これらの理由により、マールベルガーに関する正確な文献目録の作成は、非常に困難になっている。

ここに示す著作目録は、ホイングによって作成された文献目録に若干の補足および訂正を加えたものであるが⁹⁾、この目録においても若干の制限により損なわれている点もある。というのはマールベルガー自身の指摘や、他の若干の著者による記述、さらに入手可能な原典資料の点検に基づいて作成したものであるからだ。

リストアップされた著作を専門分野別に整理することは、マールベルガーの場合、論及された知識分野が多岐にわたるため、恐らく不可能であろう。氏の研究方法は規則的でないのが通例であり、非常に異なった対象がしばしば同じ巻の中で論じられているため、専門分野別リストの作成は不可能である。これに対してアルファベット順の著作目録も、大部分の表題が非常にさまざまな版で使われているため、多くの困難に遭遇する。そ

れ故、本稿では氏の著作物を年代順に配列することとする。その長所はマールベルガーの成長過程を著作に基づいて跡付けることができることにあるが、他方、刊行年不詳の若干の表題については、これを索引巻末に掲載しなければならないといった短所もあるので、この方法は必ずしも満足のいく方法とはいえない。表1に掲げる著作目録には¹⁰、例外なく略称表題のみが記されている。それは紙幅の節約のためだけでなく、氏の研究業績についてより適切な概観を与えるためでもある。

表1 P. J.マールベルガーの著作目録

A. 刊行年が明示された著作物

1. Adam Brands neu vermehrte Beschreibung seiner großen Chinesischen Reise, mit Marpergers Vorrede von den Reisen insgemein und insonderheit der orientalischen, Lübeck 1692, neue Auflagen 1723 und 1734 ;
2. Kurze Beschreibung des Pancosmi, oder des von Weigel in Copenhagen verfertigten Großbildes der Welt, Plön 1697 ;
3. Abbildung eines ehrlichen und tugendhaften Mannes, des Hrn. Goussaults, aus dem Französischen übersetzt, Copenhagen 1698 ;
4. Christian Matthias' Theatrum Historicum, aus dem Lateinischen übersetzt und von 1688 bis 1699 fortgesetzt (auch unter dem Titel: Historischer Schauplatz aller Monarchen), Frankfurt und Leipzig 1699, neue Auflage 1701 ;
5. Lob des Frauenzimmers und des Ehestandes, samt denen bey dessen Antrittung unter den Römern gebräuchlichen Ceremonien, Lübeck 1699 ;
6. Das mit Kron und Zepter prangende Preußen, bey der Krönung Friedrich I., Berlin 1701 ;
7. Probirstein der Buchhalter, oder Selbstlehrende Buchhalterschule, Ratzeburg 1701, neue Auflagen Lübeck 1707 und Leipzig 1718 ;
8. Vorausgefertigter Entwurf des künftig zu erwartenden vollkommenen Commerzienraths, Lübeck 1703 ;
9. Die Neu-Eröffnete Kauffmanns-Börse, Worin Eine vollkommene Connoissance aller zu der Handlung dienenden Sachen und Merckwürdigkeiten Auch Curieusen und Reisenden Anleitung gegeben wird, Hamburg 1704 ;
10. Das Neu-Eröffnete Manufacturen-Hauß, Hamburg 1704 ;
11. Moskowitischer Kauffmann, oder Beschreibung der Commerciën in Moskau und anderer russischer Provinzen, Lübeck 1705, neue Auflage 1723 ;
12. Schwedischer Kauffmann, oder geographische, historische Beschreibung des Königreichs Schweden, auch von dortigen Commerciën, und einem schwedisch-teutschen Wörterbuch, Wißmar und Leipzig 1706 ;

13. Der allzeit fertige Handels-Correspondent, 1. und 2. Teil, Hamburg 1706, 3. und 4. Teil (auch unter dem Titel: Kluger und wohlgeübter Kauffmanns-Secretarius), Hamburg und Leipzig 1715, neue Auflagen 1741 und 1764 ;
14. Ohnmasgeblicher Entwurf einer wohl einzurichtenden Feuerordnung, item Formular einer Feuer-Cassa-Rechnung, Wißmar 1706 ;
15. Gazophylacium artis et naturae curiosum, oder Neu-Eröffnetes Kauffmanns-Magazin, in welchem durch alle drey Reiche, etliche Tausend Simplicia und Composita ihren Ursprung, Zubereitung, Conversation und Verkauf nach, zu großen Nutzen der Materialisten und Gewürtz-Händler, auch aller mit Waaren handelnden Kauffleut beschrieben werden, Hamburg 1708, neue Auflagen 1733, 1748 und 1765 ;
16. Erläuterung der Hamburger und Amsterdamer Waaren-Preiß-Couranten und der Gelder- und Wechsel-Cours-Zettel, Hamburg 1708 ;
17. Historischer Kauffmann, oder Unterschiedl. Curieuse und Denckwürdige Der wehrten Kauffmannschafft angehende Begebenheiten und Geschichte, Welche sich hin und wieder in der Welt mehrenteils der Commerciens wegen zugetragen, Lübeck und Leipzig 1708 ;
18. Neu-Eröffnetes Handels-Gericht, oder wohlbestelltes Commerciens-Collegium, Hamburg 1709 ;
19. Ausführliche Beschreibung des Hanfes und Flachses, und der daraus verfertigten Manufacturen, wobei von den Seilern und Leinwebern usw. gehandelt wird, Leipzig 1710 ;
20. Beschreibung der Messen und Jahr-Märckte, des Meßhandels und Wechsels, Leipzig 1710 ;
21. Geographisch-historisch- und mercantorsche Beschreibung der Länder, die dem Königl. Preußischen und Brandenburgischen Zepfer unterworfen sind, Berlin 1710 ;
22. Felibiens Historie und Leben der berühmtesten europäischen Baumeister vor und nach Christi Geburt bis auf das Jahr 1400, aus dem Französischen übersetzt und bis auf 1710 fortgesetzt, Hamburg 1711 ;
23. Bürings Neue und sichere Anleitung zur Arzneykunst, vermehrt herausgegeben mit einer Vorrede von des Autoris Leben, Frankfurt 1711 ;
24. Vollkommener Schlesischer Kauffmann, oder ausführliche Beschreibung der schlesischen Commerciens usw., Breslau und Leipzig 1714 ;
25. Nothwendige und nützliche Fragen über die Kauffmannschafft, Leipzig und Flensburg 1714 ;
26. Erste Fortsetzung seiner so nothwendig als nützlichen Fragen über die Kauffmannschafft, Leipzig und Flensburg 1715 ;
27. Wohl-unterwiesener Kauffmanns-Jung, Nürnberg 1715 ;
28. Getreuer und Geschickter Handels-Diener, Nürnberg und Leipzig 1715 ;
29. Von Montibus pietatis. Assistenz- und Hülfshäusern, Lehn-Banquen und Lombards, Leibrenten, Braut-, Wittwen- und Todtencassen, wie Lotterien, Leipzig 1715, neue Auflage (mit Anmerkungen und einem Anhang herausgegeben von J. H. G. von Justi) Nürnberg 1760 ;
30. Neue und Curiose Anweisung zu allerhand Lust- und Fruchtgärten, aus dem Französischen übersetzt, Hamburg und Leipzig 1715 ;
31. Beschreibung der Wolle und des Wollhandels, Nürnberg 1715 ;

32. Das vollständige Küchen- und Keller-Dictionarium, Hamburg 1716 ;
33. Beschreibung der Banquen Und Deroselben Wie auch der Banquiers ihrem Recht, Leipzig 1716, neue Auflagen 1724 und 1737 ;
34. Ausführliche Beschreibung des Haar- und Feder-Handels, und der aus diesen Materialien verfertigten Manufacturen, Leipzig 1716 ;
35. Wohlgemeynter Vorschlag von Verheyrathung armer Bürgerstöchter und Dienstmägde, und wo der Fundus dazu herzunehmen, dabey zugleich von den Ehestands-Verächtern gehandelt wird, Hamburg 1717 ;
36. Wohlgemeyntes Bedenken von unterschiedlichen geist- und weltlichen Stiftungen, welche reiche Kauff- und andere Leute, die nur lachende Erben hinterlassen, bey ihren Lebzeiten machen könnten, Dresden und Leipzig 1717 ;
37. Erstes Hundert Gelehrter Kauffleut, Dresden und Leipzig 1717 ;
38. Andreas Gärtners Invention und Verbesserung der Fracht- und Lastwagen, Dresden 1717 ;
39. Prodromus Gärtnerianorum, oder vorläufige kurtze Vorstellung des Königl. Polnischen und Chur-Sächsischen Hof-Model-Meisters und Mechanici, H. Andr. Gärtneri, bißherigen verfertigten Kunst-Maschinen in Architectura civili und militari, deren außführliche Beschreibung künftig erfolgen soll, nebst einem am Ende angefügten Catalogo aller seiner curieusen Inventionen, Dresden 1718 ;
40. Abriß der Commerciens und Manufacturen im Churfürstenthum Sachsen und seiner incorporierten Länder, Leipzig 1718 ;
41. Entwurf einer gewissen Stiftung, Brüderschaft und Societät, welche in großen Handelsstädten Kauffmannsdienere zur Erhaltung der Nothleidenden machen können, Leipzig 1718 ;
42. Beschreibung des Huthmacher-Handwerks, Altenburg 1719 ;
43. Horologiographia, oder unterschiedliche Nachrichten von Sonnenzeigern, Schlaguhren, wie auch Glockenläuten, Dresden 1721 ;
44. Nutz- und Lustreicher Plantagen-Tractat, Dresden 1722 ;
45. Tractat von den großen Laternen und nächtlichen Illuminationibus, wie solche in allen großen und kleinen Städten sollten eingeführt werden, Dresden 1722 ;
46. Vermischte Policy- und Commerciens-Sachen, Dresden 1722 ;
47. Tractat vom Unfug des Brand-Bettelns, und der Abheffung desselben, o. O. 1722 ;
48. Beschreibung einer nach allen requisitis wohlbestaltten und vollkommenen Republik, Dresden 1722 ;
49. Wohlmeynende Gedanken über die Versorgung der Armen, 4 Stücke, o. O. 1722 (statt 4 Stücke, auch: nebst 3 Fortsetzungen) ;
50. Beschreibung eines in Theurung zu eröffnenden Proviand-Haußes, o. O. 1722 ;
51. Historisch-politische Anmerckungen über die bekannt gewordenen Colonien oder Pflanz-Städte, Dresden 1722 ;
52. Trifolium mercantile aureum oder Dreyfaches Güldenes Klee-Blatt der werthen Kauffmannschaft, Dresden und Leipzig 1723 ;
53. Beschreibung des Tuchmacher-Handwerks, Leipzig 1723 ;

54. Wohl eingerichtetes Seminarium, oder Pflantz-Schule künftig geschickter Kirchen- und Schul-Diener in Protestantischen Ländern, Leipzig 1723, neue Auflage Dresden 1727 ;
55. Tractat von Versorgung allerhand Wittwen, ohne Beschwerung des Publici, Leipzig 1723 ;
56. Neu-Eröffnete Wasser-Fahrt auf Flüssen und Canälen, Dresden und Leipzig 1723 ;
57. Tractat von Reinigung der Gossen und Strassen in großen volkreichen Städten, Dresden 1724 ;
58. Beschreibung des Elb-Stroms, Dresden 1726 ;
59. Auserlesene und andere kleine Schriften, 2 Teile, Leipzig und Rudolstadt 1733.

B. 刊行年不詳の著作物

60. Vom Gebrauche und Mißbrauche der gesalzenen Speisen and wie sonderlich das übermäßige Einschlachten zur Herbst-Zeit, in denen See-Städten, der Policey, Oeconomie und Gesundheit Schaden bringe, Lübeck ;
61. Paul Rudolph Berkenmeiers Curioser europäischer Antiquarius fortgesetzt, und mit dem curiosen Antiquario durch Asia, Afrika und Amerika vermehrt, Hamburg ;
62. Kunst sein Glück spielend zu machen oder Nachricht vom Lotto, Hamburg ;
63. Erläuterung der Holländischen Waaren-Geld- und Wechsel-Preiß-Couranten ;
64. Historische Nachricht von dem 1725 gefeyerten Jubiläo in Rom ;
65. Beschreibung eines wohl eingerichteten Seminarii militaris, oder Pflantz-Schule derer Soldaten ;
66. Vorbericht von denen Handwercks-Zünften, Innungen, Ämtern und Gilden ;
67. Curieuses Natur-, Kunst- und Handlungs-Lexicon, über alle in denen Bergwerken / bey Gärtnerey / Fischerey / ingleichen in Philosophia, Physica, Botanica, Anatomia, Medicina, Chirurgia, Arte Pharmaceutica, wie auch bey denen Kauffleuten und in denen Commerciis vorkommende Terminos Technicos ;
68. Curiose Monats-Piecen ;
69. Beschreibung des Ursprungs derer in alten, mittleren und jüngeren Zeiten erbauten Städte ;
70. Anleitung zum rechten Verstand und nutzbarer Lesung allerhand sowohl gedruckter als geschriebener Post — täglich aus unterschiedlichen Reichen, Ländern und Städten in mancherley Sprachen und Format einlaufender ordentlicher und außerordentlicher Zeitungen und Avisen ;
71. Anmerkungen über die Reisen in fremde Länder, dessen rechten Gebrauch und Mißbrauch ;
72. Der frantzösische See-Staat ;
73. Entwurf einer großen Schiff-Brüderschaft oder Societät ;
74. Beschreibung des Zeugmacher-Handwerks (neu angelegte Manufactur von allerhand Tüchern, Zeugen, Hüten, Strümpfen und Tapeten) ;
75. Anmerkungen über die Colonien und Emigranten ;
76. Singularia Aedilitia oder vom Bauwesen, und was daraus zur Policey gehöret ;
77. Miscellanea Curiosa in allerhand historische, politische, mercantilische und öconomische Wissenschaft, 8 Stücke ;

78. Der Mentor oder kluge Hofmeister, welcher das Nötigste zu einer Reise anweist ;
79. Der seinem Stand und Profession nach wohl unterwiesene Passagier ;
80. Hundert auserlesene Vorfälle in dem Italiänischen Buch-Halten ;
81. Deliciae Mercatoriae oder Kauffmännische Ergötzlichkeiten ;
82. Beschreibung der Actien, und des damit in Frankreich getriebenen Handels, wobey zugleich eine accurate Mississippische Land-Cardte zu finden ;
83. Von Altanen und dero billichen Vorzug, vor denen bißhieher gewöhnlichen Hauß-Dächern ;
84. Gedanken über die Feuers-Brünste und deren Abwendung ;
85. Alter und neuer Schauplatz weltberühmter Handelsstädte.

マールベルガーの著作目録を概観する限り、氏の研究領域の広さとその多彩な才能の豊かさに驚かされる。しかしながら同時代の官房学者や重商主義者においては、氏と同様に知識領域が極めて広範囲にわたるのが通例である。例えばツインケ（Zincke）の „Leipziger Sammlung“ の目次は¹¹、マールベルガーとほとんど同じ印象を与えるものとなっている。

マールベルガーの出版物の内容は、今日の視点に立って分類すると、その約50%のみが国民経済的または経営経済的志向の出版物であり、さらにその半分が商業学的に重要な文献であるといえよう。それ故、ここでは氏の著作目録の4分の1、すなわち約20点の出版物を取り上げ、これを中心に論評することとする。但しこのことは、それらすべての出版物を、研究対象に従って詳細に検討する、ということの意味するのではない。それらは今日のわれわれに対し必ずしも多くの得るものを提供していないので、ここでは氏にとってある程度代表的な著作と称されているもので、かつ氏の業績の概要を明らかにする上で重要と判断されるもののみを取り上げることとする。

Ⅲ 主要文献とその内容

マールベルガーの主要文献として、まず、商店従業員に対して必要な商業知識を提供することを目的にした次の3つの著書を挙げることができる¹²。著作目録の „Probirstein der Buchhalter（帳簿係の試金石）“（7）に

においては、イタリアの複式簿記を適用した商業帳簿や、あらゆる分野における単式および複式記帳例、ならびに簿記の必要性および利用が述べられている。次に „Handels-Correspondent (商業通信員)“ (13) は、商業書簡や契約書、その他あらゆる種類の文書に関する事例集であるが、それだけでなく、一部はその基礎をなす取引現象 (Geschäftsvorgänge) についても取り扱っている。さらに „Kaufmanns-Secretarius (商人の秘書)“ (13) は、厳密には後に出版された „Handels-Correspondenten“ の第3部および第4部に限定されなければならないが、これも商業書簡の文例集として役割を果たしている。しかしながら本書はこれ以外に、事業の解散に先立って行なわれるより困難な問題についても取り扱っている。これらの著書は、いずれも今日の観点から評価すれば、科学的な文献というよりはむしろ入門的文献に属するものとみなされる。しかしそれらは、刊行された当時、商人教育の水準が極めて低かったため、かなり高く評価されたのである。

次に挙げる3つの表題は、商人の成長過程において、すなわち見習から始まって店員を経て商店主に至るまでの成長過程として捉えることができる¹³。但し最後の表題の文献は予告のみにとどまっている。これらは専門家の任務や知識を問題にしているのではなく、むしろ商人歴における職務段階やそれに応じて習得されるべき包括的かつ完全な商業知識を問題としている。ところがそのかなりの部分が多かれ少なかれサヴァリーの „Parfait Négociant“ をそのまま受け継いでいるのである。これを見る限り、その体系的手法がサヴァリーのそれに類似するのは当然である。

„Kaufmanns-Jung (若き商人)“ (27) においては、見習の本分がその両親や親方の本分と共に取り扱われているが、そこには道徳的な指摘は存在しない。当時は家柄や経済的事情を考慮していたために、見習においても異なったカテゴリーの境遇を取り扱っている。次に見習に対して、その経済部門に必要な専門的知識を教示するために、幾つかの章を経済部門別に分け、一連の章をもってこれを詳述している。これに比べ、店員を志望する者が支配人になるまでに期待される一般的な商業的基本知識に対しては、

比較的にわずかな章が充てられているに過ぎない。残りは見習の法的立場や修了試験など、比較的に重要でない分野が取り扱われている。

次に„Handels-diener (商業使用人)“ (28) は、店主および商業使用人の権利および義務ならびに店員 (Kaufmannsgehilfen) 別のさまざまな職能を取り扱っている。ここでも論述範囲を一般的な商業知識に限定しているものの、より完全に、またより深く論じた教訓に対して広いスペースを充てている。この部分は幾つかの章から成るが、商店を自力で営む店員に対して知っておくべきあらゆる状況を考察している。最後は、財団や共同体の設立ならびに商業使用人の権利に関する詳論が取り上げられ、さらに付録として店員に求められる倫理的要求が述べられている。

マールベルガーは、前述の „Kauffmanns-Jung“ や „Handels-diener“ において、„Der Gelehrte Kauffmann (博識なる商人)“ という表題の著書を予告するとともに、本書に関する示唆を繰り返し述べている。しかしながら本書は、非常に多くの予備研究がなされたにもかかわらず、出版されるには至らなかったのである。

一方の „Kauffmanns-Jung“ が商業誌的構成要素において初歩的な商業教科書に匹敵するものであり、他方の „Handlungs-Diener“ が高度な専門的出版物に相当するものであったのに対して、商業の研究や学問に必要とされるものを徹底的に指導する „Der Gelehrte Kauffmann“ は、それらを任意に、あるいは古来の習慣によってではなく、すべて完璧に取り扱おうとする場合、明らかに科学的水準に達している著作物として見ることができる。もし本書が完成していたとするなら、ドイツではマールベルガーが三部作の形式で、サヴァリーの „Parfait Négociant (完全なる商人)“ に匹敵する著書を創作した、ということになったはずである。もっともマールベルガーは、サヴァリーを先駆者として利用できる状況にあったため、その前提は十分に確保されていたのである。しかしながら „Der Gelehrte Kauffmann“ は出版されなかったため、マールベルガーの商業学は先駆者の著作を完結させるのには役立たなかったのである。

マールペルガーの多数の出版物は、経済地理学や経済政策、商取引論、商業経営論といった学問領域に跨っているが、それらは一言でいうなら、経済地理学的論文 (Ländermonographien) として特徴づけられる。時系列的に指摘するなら、„Moskowitischer Kauffmann (モスクワ商人)“ (11)、„Schwedischer Kauffmann (スウェーデン商人)“ (12)、および „Schlesischer Kauffmann (シレジア商人)“ (24) の3著書を挙げることができる¹⁴。これらは目標設定および構成の観点において、広範囲にわたって一致している。最初に挙げた著書は薄い小冊子に過ぎないが、最後に挙げた „Schlesischer Kauffmann“ は、分量的に他の著書をはるかに上まわる大冊であり、前2冊よりも質的に優れている。本書が他の2冊よりも優れた書物になった理由は次のように説明することができる。すなわち一方でマールペルガーが、シュレージエン侯国の公務に携わっていただけでなく、必要な情報が容易に入手できるドイツ語文献であったため、早くからより正確な情報を収集することができたということ、および他方でこの著書がこのグループの中で最も遅く、かつ成熟したものとして成立した、ということである。

それ故にマールペルガーの地誌学が内容的に何を提供したかは、„Schlesischer Kauffmann“ によって説明することができる。本書はシュレージエンの物理的および政治的地理学の概観から始まり、歴史のおよび系譜的考察へと続いている。次いでその国の資源やその補充に必要な輸入に関する研究が続き、さらに商業、手工業および工場制手工業における商品流通、構造および組織が述べられている。そしてその最も重要な場所としてプレスラウを特に詳細に取り上げている。その後の多くの章はシュレージエンの支配的な経済部門に関する論評に充てられているが、若干の章は同国で慣習となっている度量衡に充てられている。さらにシュレージエンのメッセや市場が紹介され、関税制度に関して言及されるとともに、同国の情報および財貨流通の状況および可能性が述べられている。そして最後に同国の法律関係における特色が考察されている。

このように本書は、商業誌的特質と地域の特徴とを一体化させた内容の

ものであった。それ故、本書は当時のシュレージエンにおいて、またそこで商業を営む商人にとって、恐らく優れた情報源になっていたのである。たとえ本書の意義が商業経営論よりも商取引論にとって大きいとしても、本書が個別経済的に興味を引かないことはない。というのは本書が基礎的な市場探索の事例を早期に取り上げたことにより、企業がそれ自身の市場探索を取引上の個別市場問題に限定するとともに、そこに集中することにより、合理化できることを可能にしたからである。

次いで商取引論にとって重要な著書として以下の2点を挙げることができる¹⁵。その中心課題は、商品取引の促進、軽減および保全について定めた市場制度にある。まず „Beschreibung der Messen und Jahr-Märkte (メッセおよび年市の叙述)“ (20) は、2つの目標を追求している。すなわち第1に商品メッセを商業振興施設として知らしめ、第2にメッセの来客に対して合目的行動の指針を与える、ということである。当時行なわれたメッセの種類や場所、ならびにこの市場開催の長短、特権および優遇に関する詳論は、最初の課題に役立っている。また本書の末尾で取り扱われている市場規則や市場判決もこれに属するものである。他方、商人が市場訪問の前後およびその間に注意すべきこと、および果たすべきことに関する論究は、後者の目標設定に対する内容である。

次に取り上げる „Neu-Eröffnete Handels-Gericht (新公開商業裁判所)“ (18) は、本質的に貴重な出版物である¹⁶。フランスの重商主義者サヴァリーは1673年の „Ordonnance de Commerce“ („Code Savary“)をもってフランス商業における弊害と戦い、総合経済の発展に寄与しようとしたが、ドイツでは官房学者マールベルガーがその役割を果たした。すなわち氏はドイツ商業裁判所の絶望的な状況を救済するために、商法的事情の改善を通じて尽力したのである。

マールベルガーは、まず望ましい商業裁判制度の構築に取り組んだ。氏は商業会議所に関心をもっていたが、これを商法的、商業行政的および商業政策的権限を兼ね備えた機関として推奨した。すなわち氏は商業裁判所

の任務を本質的に下級官庁や商工会議所に担当させようとしたのである。

次いで氏は商工業にとって特に重要な法律分野に取り組み、関係する法律および命令を詳細に論評するとともに、多数の経済法的諸問題に対して意見を述べ、さらに手形法の草案まで提出している。マールペルガーのこの大冊には、おびただしい法律鑑定集が連なっているが、その大部分はヴァリーの „Parères (鑑定集)“ から受け継がれたものであり、あらゆる係争事件において判決を捜し易いように工夫してある。

マールペルガーの多面的才能とそれに伴う多数の出版物において、非常に専門的な研究が見出される。例えば氏の著作目録の中にある特殊経営経済学の教育に関する草稿はこれに該当するものであり、最初の特殊経営経済学研究として注目に値する。このグループに分類される „Beschreibung des Haar- und Feder-Handels (毛髪・羽毛取引の叙述)“ (34) では、一般的小および特殊の商人問題が取り上げられているほか、商品誌的観点からも論じられており、特殊経営経済学にとって重要な文献といえよう。また „Beschreibung des Huthmacher- Handwerks (帽子製造業者および手工業者の叙述)“ (42) は、商業誌的、商品誌的および科学技術的要素を相互に結び付けている点において特筆すべき文献である¹⁷。

さらに „Neu-Eröffnetes Manufacturen-Hauß (新公開工場制手工業ハウス)“ (10) は、工業経営論の先駆と見なすことができる¹⁸。本書には確かに商業誌や工業政策、工業権に関する詳論も含まれているが、その専門性は科学技術の強調によって保たれている。またマールペルガーは本書において „Handelwissenschaft“ を取り上げる際、当時一般に使用されていた „Handlung“ という語の原義から出発している。当時この専門用語は、Warenhandlung や Manufakturhandlung、Assekuranzhandlung といった形で使用されていたため、„Handel“ という語と混同され、専門領域の間で混乱が起こっていた。それ故、氏は専門用語の語源を明らかにすることによって、専門領域の境界設定をしようと努めたのである。

またマールペルガーは、„Beschreibung der Banquen“ (33) において特

に銀行商業（Bankhandlung）を詳細に取り扱っている¹⁹。レツフェルホルツはこの浩瀚な著書をドイツ銀行経営論の最初の著作と称している。本書は既に出版された時代に大成功を収め、さらに世紀転換期まで銀行に関する基本文献として認められるとともに、その後の専門文献に多大な影響を及ぼした。

マールベルガーは本書において、綿密かつ体系的に銀行の成立を述べ、そのさまざまな形態や機能、銀行形態別の私経済的および総合経済的な長短、銀行業務、銀行経営に携わる従事者の地位および任務、ならびに銀行法上の諸問題を取り扱っている。従って本書は、マールベルガーが著した著作の中で最良のものであり、恐らくドイツ語文献で科学的特徴を有する最初の完全な経済部門論であるといえよう。

ところでマールベルガーは、1714年に商人問答書である „Nothwendige und nützliche Fragen über die Kauffmannschaft（商業に関する必要かつ有益な諸問題）“（25）を出版するとともに、翌年には „Erste Fortsetzung“（26）を出版している。同じく1715年には „Kauffmanns-Jung“と „Handels-Diener“が出版され、それらの著書において既に „Gelehrte Kauffmann“の出版が予告されていた。しかしながら同書は結局出版されることはなかった。このことから著作目録の（25）と（26）の著書は、 „Gelehrte Kauffmann“に関する予備研究を基礎に成立したものと推測される²⁰。

この仮説はまた次の2つの根拠から立証することができる。第1に、 „Nothwendige und nützliche Fragen über die Kauffmannschaft“が、修業中の商人や独立商店を営む商人だけでなく、確かな商業知識を重視する他の職業従事者（例えば公務に携わる官房学者）を含めた読者層を対象にしているからである。第2に、この仮説が2冊の著書の広い枠組みによって支えられており、そのうちの一方が商店における商人の経営管理を、またもう一方が国家経済に携わる官房学者の商業政策を対象としているからである²¹。第1巻の内容は、商業経営の前提となるあらゆる種類の商業誌的事情に関する指導と、経営過程の適切な処理および有利な遂行に関する手引

きから成っている。また後続巻の方は、当時慣例の重商主義的商業政策の手段、すなわち工業振興措置、助成機関設立の提案、黒字決算を達成する規定を取り上げるとともに、マールベルガーによって初めて主張された総合大学における商業学講座の設置に関する意見を取り上げている。

この2冊の著書は、簡潔なまとまった論文的性格を有する問答から成るもので、ハンドブック的性格をもつものである。つまりマールベルガーは両著書の欠陥を除去し、これを全体としてより高い水準に引き上げることによって、本来の目的である „Gelehrte Kauffmann“ に近い科学的著書を完成させようと努めたのである²²。

次いで商業の専門学校教育を行なうための文献として、官房学的精神から生まれた著書がある。著作目録にある „Trifolium mercantile aureum“ (52) は、マールベルガーが専門学校制度について述べた初期の提案を再度取り上げ、詳細に根拠づけるとともに、これを教育制度として拡張させたものである²³。サヴァリーが „Parfait Négociant“ において商業の独学的研究のみを考えたのに対し、マールベルガーは本書において既に職業予備学校をかなり詳細なイメージで描いていたのである。勿論、氏が支援した商業アカデミーは、今日的な意味における単科大学ではなく、高等商業学校として理解される。しかしその発展は、遙か後世に、すなわち19世紀末になって商科大学として、初めてその成功を収めたのである。この意味において、マールベルガーが商業学校制度の発展の糸口を開いたといっても過言ではない。またマールベルガーによる教育研修所 (Informations-Collegien) の設立に関する提案も興味深い。これは市民大学的な育成施設のことであり、既に完全な職業商人のための専門的再教育に役立つとするものである。

ところで „Historischer Kauffmann (歴史的商人)“ (17) は、狭義の商業学の分野に入れてはいけない。本書は個別経済的内容をほとんど含んでおらず、むしろあらゆる時代のさまざまな国の商業を取り扱った商業史の前身と見なしうるからである。また „Erstes Hundert Gelehrter Kauffleute (博学商人ベスト100)“ (37) も、歴史的関心を引き起こすものである²⁴。但し

この奇妙な文献には、商人や作家、学者、政治家といった人たちの簡単な伝記が集められているだけで、商業や商業誌に関する意義は多くの場合語られていない。

これに対して最後に挙げる „Neu-Eröffnetes Kauffmanns-Magazin (新公開商人マガジン)“(15) は、1708年に出版され、ドイツ語による最初の商業辞典として斯学に大いに役立った²⁵。1733年に出版された第2版の完全な表題によれば、本書は「医学、植物学、化学、薬種学、鉱山学などから成り、とりわけ高貴な商人」に役立つと書かれている。本書は本質的に商品学的指摘や重商主義商業学に関する寄稿を含んでいるため、その百科事典的な印象は、内容的に錯覚を起こさせるであろう。

本書の特色はまず商業学分野に役立つ内容を伝えていることである。すなわち商品学的見出し語が非常に多く、概して簡単な説明で済まされているのである。他方、経済学的見出し語はほとんど登場せず、しばしば詳細な寄稿が提供されているだけである。このことから2つの主要領域の重要性は相対的に等しいと考えられる。

取り上げられている見出し語の中には、われわれにとって風変わりと思われる多くの語が含まれている。しかしながらそれらは、マールベルガーが百科事典的な情報を真剣に取り扱おうとしていた時代に重要であったもので、それ故にマールベルガーが除外しえなかったものなのである。いずれにせよ、この事典に最も明瞭に表現されている氏の編集者のおよび叙述的業績は、過少評価されてはならない。本書がマールベルガーの死後もなお、多くの版を重ねたことは、疑いなく同時代の人々が本書を愛読したことを物語っている。

„Kauffmanns-Magazin“の学史的意義は、本書がサヴァリーの息子達による商業辞書よりも前に出版された点、ならびに同書を含めて後に出版されたすべての辞典的著作に対し、本書が著しい影響を及ぼした点に見出すことができる。このことは、1741年から何度も改訂され、出版された „Allgemeine Schatz-Kammer Der Kauffmannschaft“や、1752年にルード

ヴィッチによって出版された „Akademie der Kaufleute“、1773年から刊行されたクリュニッツ (Johann Georg Krünitz) の百科事典に当てはまる。そればかりか1731年から出版され、たちまち有名になったツェドラー百科事典に見られるように、百科事典の発達にもこのことが当てはまる。それ故マールペルガーは、偉大な百科全書家の開拓者の1人として数えられる。かくて、およそ1750年から1780年の間に全盛期を迎えた百科全書家たちは、その体系的および情報伝達活動を通じて、すべての学問分野に対し生産的な刺激を与え続けたのである²⁶。

IV 重商主義商業学への貢献

マールペルガーは、フランスの偉大な商業経営学の先駆者サヴァリー (Jacques Savary) の後継者あるいは崇拜者、模倣者と言われており、サヴァリーと同じ重商主義商業学の時代に数えられるカメラリストである。本稿でいう重商主義商業学とは、今日の経営経済学およびその特殊部門である商業経済学の先行科学であり、この科学の中で最も早期に生成した学問分野のことである。重商主義商業学の時代(1650年頃から1800年頃まで)は、これを系譜的に見るなら、非科学的あるいは前科学的な商業誌の時代に続く時期であり、また商業学の時代 (1750年頃から1900年頃まで) に先行する発展段階として位置づけることができる。その特徴は、呼称からも読み取れるように、個別経済学的特質をもつということである。すなわち重商主義商業学においては、一方で特に商業の構造や過程を研究することが際立っていると同時に、他方では重商主義およびカメラリスムスの影響を受けているということである。

重商主義のドイツの形態として理解されているカメラリスムスは、第1に君主の財政と君主によって絶対的に支配された国家財政を保障するとともに、可能ならばその財政状態を改善するという目標を追求するものであった。その際、カメラリスムスの本質的な問題領域は、財政問題、政策

問題および経済問題の3つから成っていた²⁷。すなわち第1に、秩序立った財政管理に配慮するとともに、一般に常に増大する支出に充てるのに適した財源を租税政策によって開拓することが不可避であった（財政問題）。それ故、財務官の任務はこの関係において課せられていた。

第2に、効率的な経済運営を行なうとともに、それに適した経済政策的手段により、課税対象となる農林企業や商工企業の収益を上げさせ、納税義務を課することが不可欠であった（政策問題）。この目的のために、技術的および商業的養成機関を設立するとともに、科学的・教訓的に満足しうる個別経済的専門文献を奨励することによって、とりわけ私経済的合理化に配慮することが必要であった。

第3に、君主または国家の領有地や鉱山、工場制手工業、公企業といった経営経済の管理業務を改善し、最大限の収益性を得られるようにすることが必要であった（経済問題）。その際、特殊個別経済学の成果を顧慮したことが、少なからずこれに役立った。

ところで生産性の高い重商主義商業学の教育は、公的利益に役立っただけでなく、商業を営む個人の私経済的目的にも適合していた。商業学においてサヴァリーやマールベルガーが影響を及ぼした30年戦争後の17世紀（1648年から1700年）は、復興の時代であるとともに、急速な経済発展を遂げた時代でもあった。それ故、理論的に基礎づけられた商人的知識をもった人には絶好の機会が与えられていた。とりわけ商店主は重商主義商業学の学説に関心を寄せていた。これにはいくつかの理由が挙げられる²⁸。その1は、商企業の場合、他の事業経営とは異なり、経済問題が技術問題よりもかなり優先されていたということである。その2は、近世初頭になると、商業経営が今日の工業経営と同様に経済生活において支配的地位に立っていたということである。その3は、当時、商業経営が比較的複雑化してきていたために、その指導者に対する需要がかなり高まっていたということである。マールベルガーは、このような背景の下に1730年まで、サヴァリーに匹敵する多数の著作をライフワークとして遺したのである。

サヴァリーとマールベルガーとの間の34年間に及ぶ世代的相違は、概してマールベルガーにとって有利に影響したと考えられる²⁹。その理由の第1は、この期間にローマ・ドイツ帝国の経済が急速に発展し、若干の国々では、既にサヴァリーによって紹介されていたような状況が近づいていたからである。

第2は、フランスの商業実践が与えた影響とともに、サヴァリーの『完全なる商人』が公刊されたことである。本書はなるほどフランス商業について書かれたものであるが、その大部分はドイツ商業に転用されうるものであった。しかも両国の経済発展段階の相違のために、サヴァリーの著書が他の著書によって凌駕されることはないという大きな利点があった。それ故マールベルガーは、サヴァリーの同書を実り豊かな典拠として利用したのである。

第3に、衰退しつつあった重商主義にもかかわらず、両者間の数十年間に及ぶ時代的ギャップは、結果的にドイツにおいて官房学の隆盛を招来したからである。その成果はサヴァリーの時代にはまだ対比されるほどのものではなかったが、マールベルガーが活躍する頃には、ベッヒャーのような官房学者を必要とするようになっていたのである。それ故マールベルガーの場合、その優れた著作物の創作環境は、サヴァリーの時代よりも有利であったと考えられる。

しかしながら学者によっては、サヴァリーに示したような称賛をマールベルガーには与えていない。その理由は2人の商業学者の異なった人格に基づいていると考えられる。もちろん両者を比較する場合、次の事柄を見逃すわけにはいかない³⁰。すなわちサヴァリーの生活状態は、マールベルガーのそれよりも概してはるかに穏やかで、また幸福に満ちていたということである。これに対し、マールベルガーは休むことなく町から町へと駆り立てられ、絶えず新たな経済的困難に遭遇しながら人生を過ごしたのである。さらにマールベルガーの業績は、サヴァリーのそれと同様に今日の尺度で評価してはならないということである。つまりそれはマールベル

ガーが影響を及ぼした時代からのみ評価されなければならない、ということである。

重商主義商業学におけるマールベルガーの意義については、非常にさまざまな見解が存在する。18世紀におけるその評価は、概してかなり肯定的に思える。ツインケ（Zincke）は1745年にマールベルガーについて「博学の商人であり、真に商人的学者の稀な例」であると述べ、氏の著作について次のように絶賛している。「商業に専念し、少しばかり綿密に、しかも小商人的ではなく、その理論を同時に商店や商館の日々の業務遂行と結びつけようとする者は、これらの著書なしには済ますことはできない。…一言でいうと、それらは収集した素材と建築材料をそこに含んでいるのである。それは商業学によって完全かつ理路整然とした学問体系を打ち立て、この非常に広範な学問を確かな学説に導くためのものである³¹」と。

次いでルードヴィッチも、1768年に „Grundriß eines vollständigen Kaufmanns-System“の序言で、若干控えめではあるが、肯定的な意見を述べている³²。ただしルードヴィッチはマールベルガーの名前を特に挙げていないのである。しかしその記述内容から判断すると、ルードヴィッチは恐らくマールベルガーのことを十分に知っており、氏を心に思い描いていたと考えられる。

ところが19世紀に入ると、繰り返し再版されたマールベルガーの著作に対して、極めて控えめな評価が下されるようになった。その原因は、マールベルガーの著作が時代とともに古くなり、とりわけルードヴィッチやロイクスの著書が出版されてからは、経済理論や経済実践に対して、もはや多くのものを提供できなくなったことにある。さらにこれに関連して、ウェーバーやザイフェルトによって強調された事情も影響を及ぼしている。すなわち19世紀に入ると、商業学はほとんど進歩することなく、また概してわずかな関心しか得られず、それどころか、しばしば見下されるようになったのである³³。

その原因の1つは、大学において官房学から分離した総合経済的学問分

野だけが国民経済学に発展していったのに対して、個別経済学の学問分野はその時点で消滅してしまったからである。当時支配的だった「自由放任」原理は、私経済を抑制することもなければ、国家的に大学講座を設置するというように、特に支援することもなかったからである。このように個々の理由が何であれ、この時代の学者達はマールベルガーについて表面的に言及するか、あるいは全く言及しないか、もしくは厳しく部分的に激しい批判を述べるかであった。

ロイクスは1818年の文献において、マールベルガーについて極めて儀礼的に言及しているに過ぎないが³⁴、リントヴルムは、1869年の『商業経営論』において、マールベルガーについて考慮していないばかりか、ルドヴィッチについても全く無視してしまっている³⁵。さらにロッシャーは1874年の文献でマールベルガーに対してかなり厳しい意見を唱えている³⁶。またフランク（1884年）は、マールベルガーの著作について否定的な側面とともに肯定的な側面を指摘している³⁷。

しかし20世紀における評価は、ヘラウアーのような一部の例外を除き、一般にマールベルガーの著書の欠点を無視することなく、より真価を認め、安定したものとなった。このことは時代的隔たりに伴って、判断の客観性が高まったことから説明されうる。

さらに次のことに注意しなければならない。すなわち個別経済学がめざましい進歩を遂げた後、マールベルガーの著書から直接的な効用を引き出すのではなく、むしろそれらの著書を史的観点の下で評価しなければならないのである。このことはマールベルガーをその時代とその可能性から正當に評価しようとする新しい試みを意味する。

マールベルガーの著書を詳細に取り扱い、またその多数の論文の功績を詳しく論じているウェーバーは、1914年の著書においてマールベルガーの「うんざりする饒舌」と「嘆かわしい浅薄」を厳しく批判している。しかし氏は次の点を強調しながら要約している。すなわちマールベルガーは「総合的な商業学文献の活気ある発展のきっかけをわれわれに与えた」とし

かしそれは別な面からはほとんど期待されていなかった。というのは「マールベルガーの同時代人の著作は、例外を除き、まさに取るに足りないものだ³⁸」からである。

次に歴史家の拠り所として特にマールベルガーの実り豊かな内容を力説しているゾムバルトは、1919年の著書において、若干控えめではあるが、「マールベルガーの数えきれないほどの著作物から多くのことを学ぶことができる³⁹」と述べている。

しかしながら マールベルガーに関する恐らく最も有利な総合的評価は、レツフェルホルツの1935年の文献に述べられているものであろう。氏はマールベルガーの個別経済学的に重要な若干の著書を詳細に取扱うとともに、その長所を „Beschreibung der Banquen“において強調している⁴⁰。またライターも1961年の著書においてマールベルガーの商業学的影響力について繰り返し指摘しつつ、マールベルガーを官房学的作家として見なしている⁴¹。さらに1963年の著書で述べられたマールベルガーに関するザイフェルトの簡潔な意見は、マールベルガーの作品において明白な量と質との矛盾に関する指摘によって特徴づけられる⁴²。最後に、ベリンガーは経営経済学全体の発展に関する意義をマールベルガーには認めていないが、その下位科目の考察において、すなわちマールベルガーの銀行に関する著書において、銀行経営経済学の発展における卓越した点が見出されると述べている⁴³。従って全体としてマールベルガーに対する評価は、今日では、どちらかといえば好意的な傾向にあるといえよう。

ところでマールベルガーの著作物には、どのような特徴がみられるのであろうか。氏の著作物における形式的な特徴については、既に先学が指摘しているところであるが、それらを要約すると次のように言うことができる。すなわち、ごてごてとした表現と冗長な叙述とによって特徴づけられる概して拙劣な文体、頻繁な反復、および重要なものとそうでないものとを並存させる不快な文章である。これらの欠点は極端な多作の結果であるが、氏がしばしば経済的貧困に陥ったこともその一因として考慮すべきで

あろう。また次のことも忘れてはならない。氏の文体において、われわれに不快感を催させる多くのものは、当時流行していたバロック式表現の形式に一致しているという点である⁴⁴。

他方、マールペルガーの著作物における体系性を見る限り、残念ながら氏は体系的に研究する学者ではなかったように思われる。このことは氏の個々のモノグラフの構成において現れているだけでなく、氏の全集にも同様に当てはまる。それらを見る価値のある多数のモザイク的素材の集合にたとえられるが、そこからは不完全な全体像しか作ることはできないのである⁴⁵。

従って、マールペルガーが包括的に体系づけた、決定的な大著を出版しえなかったのは、このような状況が影響を及ぼしていたと考えられる。反対にもし彼に幾つもの副次的な仕事を断る生活環境が許されていたならば、恐らくその種の大著を著すことができたと思われる。

ところでマールペルガーには、早期からあらゆるものに取り組み、博学者になろうとする性向がみられたが、この性格はとりわけ包括的な資料編集を行なうのに適していた。また氏は、商業学全般に関して完成した叙述を遺すことに成功しなかったものの、優れた観察者として、また熱心な収集家として、それに必要な予備研究を行なっている。その際、多数の重要な商業地に関する正確な知識や、さまざまな活動から得た豊かな経験、そして並外れた博学的知識が氏にとって役立ったのは勿論であろう⁴⁶。

マールペルガーが多くの知的遺産をサヴァリーとベッヒャーから受け継いでいるのは既に周知のとおりであるが、このことについて非難するのは適切ではない。というのは氏がこの2人の原典を十分に利用しなかったなら、むしろわれわれはマールペルガーに知的遺産の継承責任を負わせねばならなかったと思うからである。

マールペルガーは、ドイツ事情に関して „Parfait Négociant“ に匹敵するものをドイツ語で著そうと努めたが、結局、これは実現されなかった。しかしマールペルガーは、これによって著名なフランス人の著書を、同時代

の人々や、次世代の商人や学者達に対して身近なものにすることができたのである。また氏は、ベッヒャーの広範な作品の中から、一部はかなり注目すべき個別経済的要素を取り出し、これを実務に広く利用できるようにし、さらにそれらを重商主義商業学に統合させた⁴⁷。これらの功績は勿論マールベルガーに与えられて然るべきである。

このようにマールベルガーの意義は、商業学の仲介者としての役割に結びついている。すなわち、マールベルガーがその先駆者に対して、またその後継者に対して、仲介者としての意義を果たさなかったとしても、氏が介在しなかったなら、先駆者の影響はより限定されていただろうし、また後継者によるその利用もより制限されていたであろう、ということである。但しその際、マールベルガーをルードヴィッチとロイクスの先駆者としてのみ捉えてはならない。マールベルガーはこの2人の後継者のみならず、他の多数の商業学者にも多かれ少なかれ著しい影響を及ぼすとともに、ゲッティンゲン大学の経済学者であり、技術者であったバックマンのような後期官房学者にも影響を及ぼしているからである⁴⁸。

マールベルガーの基本的思想は、既に言及したとおり重商主義であり、この思想に基づき、氏は官房学的役人として、また作家として公共福祉に役立つと考えた。それ故に氏は、その著書を科学的小および経済的目標と並んで、とりわけ教育的目標を達成するためのものとして企図した。かくてマールベルガーは商人教育の改善や、商業補助人および商業見習の指導に関して寄稿を行ない、これを通じて経営的収益力の向上や総合経済的収益力の改善に努めた。

しかしマールベルガーは自身の経歴から、しばしばそれを達成することが困難であることを知っていた。彼らは就業に伴ってその業務を独習しなければならなかったからである。かくて氏は、時代よりもはるかに先立つ1715年にある提案を行なった。それは商業後継者の高度な教育に資するアカデミーの設立である⁴⁹。この計画は再度、1723年に具申された。

氏は成人学校のように商人の再教育に役立つ教育研修所や、総合大学へ

の商学部の設置を推奨し、これによってさらに歩みを先へ進めた。またもう一方の、商人および商業顧問官のための単科大学での専門的学習に関する要求もマールベルガーによるものである。

マールベルガーにとって重商主義思想が極めて重要であったことは、専門学校および単科大学に関する氏のプロジェクトと他の経済振興計画との関係から明らかである。公務に携わる官房学者として、この計画を実施しようとして望んでいたマールベルガーは、1709年、商業協会(Commerciën-Collegien)の設立を提案した⁵⁰。今日の商業会議所に相当するこの機関は、広範な商業行政的、商業政策的および商業裁判所的権限を持ち、氏が提案した商科大学的な施設で養成される経済学者によって構成されていた。またマールベルガーは、その個々の著作やドレスデン国立公文書館に収蔵されている多数の文書から明らかのように、この他にも多数の商工業問題において提案を行っており、当時それらは極めて進歩的と思われるものであった。このことから氏が商業政策上、判断力に優れた行政顧問であったことが分る。こうしたマールベルガーの発案による計画が必ずしもすべて具体化されたわけではないにせよ、氏が重商主義者として、公務において実り豊かな活動をしたことは明らかである。

マールベルガーの官房学的思想は、とりわけ商業に関する個別経済的考察および行動規則に現れている。氏は官房学者として、経済政策的に望ましい企業者の積極的行動の刺激物として、利潤の重要性を十分に認識していた。その際、氏は商業利潤の経済的根拠づけとともに、その道徳的根拠づけも必要であると考えた。すなわち氏によれば、商業利潤は経営を行なう個人のためにのみ獲得されるものではなく、むしろ第一義的には国民経済のために獲得されるべきものである⁵¹。このように氏は単に商人の極大利潤への飽くなき追求努力を積極的に支持するだけでなく、さらに適正利潤の意味においても意見を述べている。その把握が困難であることをマールベルガーが認識していたかどうかは明らかではないが、国民経済を考える際、その目標達成手段として利潤が適しているという観念から氏

が発効していたことは確かである。

結びにかえて

本稿ではこれまでにマールベルガーの商業学について、その広範囲にわたる著作物を概観するとともに、氏の主要文献を取り上げ、その特色や学史的意義などを考察し、さらに重商主義商業学に対する氏の貢献をさまざまな側面から論じてきた。ここでは最後に重商主義商業学を支えた氏の学問的特質を要約し、商業学における氏の学史的意義を明らかにしようと思う。

第1に、マールベルガーはその多才さと勤勉さにより、ほとんど常に幾つかの著書に同時に取り組んでいたため、„Gelehrte Kauffmann“のように幾度も予告されていたにもかかわらず、その出版が計画だけに止まってしまったケースもあるということである。

第2に、マールベルガーがしばしば規律のない研究方法により濫作に陥ってしまったことである。氏の商業学的あるいは官房学的著作において、他の統一的な学問分野から引用した混合物が散見するのは、このような事情によるものであろう。またその反対に経済問題に寄与しなかった著作において、時折、経済事情が詳細に論究されることもあった。

第3に、マールベルガーが包括的にして体系的な主著を完成しえなかったため、氏の経済学体系を検証するには、多数のモザイク的文献を手掛かりにこれを組み立てなければならないのである。実り豊かな商業学的内容が多く、著作に分散していたため、氏は苦心の末、それらを相互に関係づけなければならない。従ってそれらのモザイクを収集する際は、詳細に論究した若干の著書のみ限定して体系構成を行なってはならないのである。

第4に、マールベルガーは生存中に、商業学文献において大きな成功を収めたが、氏の著書の内容は、未知の対象や関係を探求する組織的かつ体

系的研究の意味における科学としてはほとんど理解することができないのである。しかし知る価値のある事実の収集と経験によって裏付けられた行動規則の推奨によって特徴づけられる氏の多くの著書は、明らかにその時代の要求にこたえていたといえよう。しばしば散見する皮相性にもかかわらず、それらが広く普及し、しばしば幾度も版を重ね、多くの読者によって熱心に読まれたのはその証左である。またドイツの専門文献において、18世紀前半に、氏の文献以外で幾度も再版されたものはないし、またそれに匹敵するものも存在しないといわれている。

第5に、マールベルガーは非常に長期にわたってライフワークを刊行しているが、それらのライフワークの間において著しい質的相違が見られることである。氏の著作物をこの観点から評価すると、かなりの出版物が平均的水準にあるといえよう。しかしそれ以外の若干の出版物はその水準をはるかに凌駕していると考えられる。

最後に、マールベルガーには厳しい的確な批判がある一方、氏は官房学的経済政策家として、また重商主義商業学者として、真に正当な評価を受けていたと指摘することができる。今日もお経営経済学史において、また社会経済史において、氏が重要であるということを知る限り、氏の学問的功績は評価に値するであろう。

注

- 1 我が国でこれまでにマールベルガーに触れた研究としては次の文献を挙げることができる。増地庸治郎『経営経済学序論』同文館、1926年。佐々木吉郎『新版経営経済学の成立』中央書房、1955年。風巻義孝『商品学の誕生』東洋経済新報社、1980年。北村健之助『経営学前史』学文社、1994年。韓義泳『文献史的商品学』大阪経済法科大学出版部、1999年。該当箇所はそれらの多くは数行から1頁程度の記述に止まっており、詳しい記述はほとんど見当たらない。但し佐々木吉郎の『新版経営経済学の成立』においては数頁にわたってマールベルガーの略歴と業績が紹介されている。
- 2 マールベルガーの生涯については次の文献による。
Sundhoff, E.: *Dreihundert Jahre Handelswissenschaft*, Göttingen 1979, S. 52-56.
- 3 本書は1726年にアムステルダムで „Dictionnaire Universel de Commerce” というタイトル

で出版され、その後続版は1732に出版されている。

- 4 Hirsching, F. C. G.: Historisch-literalisches Handbuch, 4. Band, 2. Abteilung, 1900, S. 360.
- 5 Frank, J.: Marperger, Paul Jakob, in: Allgemeine Deutsche Biographie, 20. Bd., S. 406.
- 6 ライブニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz) は1646年に生まれ、1716年に没している。
- 7 Adolf Harnack: Geschichte der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, Berlin 1900, 1. Band, 1. Hälfte, S. 152 f.
- 8 Bernhard Hoyng: Paul Jakob Marperger als Betriebswirtschaftler, Diplomarbeit Köln 1961, S. 16 ff.
- 9 Vgl. Sundhoff, a. a. O., S. 57.
- 10 Ebenda, S. 59-62.
- 11 Georg Heinrich Zincke: Leipziger Sammlungen, Leipzig 1744.
- 12 Sundhoff, a. a. O., S. 63.
- 13 Ebenda, S. 63-65.
- 14 Ebenda, S. 65 f.
- 15 Ebenda, S. 66.
- 16 Ebenda, S. 67.
- 17 Ebenda, S. 67.
- 18 Ebenda, S. 67 f.
- 19 Ebenda, S. 68.
- 20 Ebenda, S. 68.
- 21 Ebenda, S. 68.
- 22 Ebenda, S. 68 f.
- 23 Ebenda, S. 69.
- 24 Ebenda, S. 69.
- 25 Ebenda, S. 69 f.
- 26 Ebenda, S. 70 f.
- 27 Ebenda, S. 49 f.
- 28 Ebenda, S. 50.
- 29 Ebenda, S. 51.
- 30 Ebenda, S. 51 f.
- 31 Zincke, G. H.: Leipziger Sammlungen, 2. Band, S. 422.
- 32 Ludovici, C. G.: Kaufmanns-System, Vorrede, S. 4.
- 33 19世紀における商業学の衰退については次の文献を参照されたい。
Weber, E.: Literaturgeschichte der Handelsbetriebslehre, Tübingen 1914, S. 111 ff.
Seyffert, R.: Über Begriff, Aufgabe und Entwicklung der Betriebswirtschaftslehre, 6. Aufl., Stuttgart 1971, S. 42 ff.

- 34 Leuchs, J. M.: System des Handels, 2. Auflage, Nürnberg 1817/18, 3. Band, S. 242.
- 35 Arnold Lindwurm: Die Handelsbetriebslehre und die Entwicklung des Welthandels, Stuttgart und Leipzig 1869.
- 36 Wilhelm Georg Friedrich Roscher: Geschichte der Nationalökonomik in Deutschland, München 1874, S. 301.
- 37 Franck, J.: Paul Jakob Marperger, in: Allgemeine Deutsche Biographie, Leipzig 1884, 20. Band, S. 405 ff.
- 38 Weber, E.: Literaturgeschichte, S. 37 ff., insbesondere S. 38, 39, 43 und 66.
- 39 Sombart, W.: Kapitalismus, 3. Auflage, München und Leipzig 1919, 2. Band, S. 428.
- 40 Löffelholz, J.: Geschichte der Betriebswirtschaft und Betriebswirtschaftslehre, Stuttgart 1935, S. 232.
- 41 Leitherer, E.: Geschichte der handels- und absatzwirtschaftlichen Literatur, Köln und Opladen 1961, S. 49, 51, 54 und 65.
- 42 Seyffert, R.: Über Begriff, Aufgabe und Entwicklung der Betriebswirtschaftslehre, 6. Aufl., Stuttgart 1971, S. 38.
- 43 Bellinger, B.: Geschichte der Betriebswirtschaftslehre, Stuttgart 1967, S. 47 und 84.
- 44 Sundhoff, a. a. O., S. 74.
- 45 Ebenda, S. 74.
- 46 Ebenda, S. 74 f.
- 47 Ebenda, S. 75.
- 48 Ebenda, S. 75.
- 49 Ebenda, S. 76.
- 50 Ebenda, S. 76 f.
- 51 Ebenda, S. 77.